HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ウイルタ語における形動詞能動形の交替とゆれ
Author(s)	森貝, 聡恵
Citation	北方言語研究, 5, 153-170
Issue Date	2015-03-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/58344
Type	bulletin (article)
File Information	09Morikai.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 5: 153-170（北方言語ネットワーク編，北海道大学大学院文学研究科，2015）

ウイルタ語における形動詞能動形の交替とゆれ

森 貝 聡 恵
（東京外国語大学修士課程）

0. はじめに

ウイルタ語[1]の形動詞能動形現在には三種類の形態がある[2]。その内の 1 つ-si は、過去形では-či(n)[3]として現れ、ウイルタ語においては継続や反復を表す動詞につくと言われている (池上 1972 [2001])。動詞がどの形態をとるかは語彙的に決まっているとされてきたが、次の 2 つの動詞 təə-「座る」と ili-「立つ」に関しては使い分けのあることが指摘されている (池上 1972 [2001])。

(1) a. nooči či təəsiči
3PL all.the.time sit-PRES-3PL
彼らはずっと座っている。
(Ozolin'a 2001: 361)

b. moo mugdəənduni təərini.
wood stump-DAT-3SG sit.down-PRES-3SG
木のかぶにかれはこしかける。
(池上 1997: 203)

(2) a. nari ilisini.
person stand-PRES-3SG
人が立っている
(池上 1997: 79)

b. buju xamaree bəgǰiǰi ilixani
bear back leg-INS stand.up-PAST-3SG
熊は後足で立ち上がった
(澗潟 1981: 94)

この 2 つの動詞では、同語幹に 2 つの形動詞能動形が交替することで、意味的な差が生じている。しかし、実際にはこの他にも、形動詞能動形に-si/-či(n)をとると言われている動詞がより生産的な形動詞能動形語尾+ri/-xA(n)をとる例が見られ、その中には、-si/-či(n)形と+ri/-xA(n)形の間で意味に差が生じていると思われる例もある。本稿では、形動詞能動形に

---

[1] サハリンの少数民族・ウイルタ人の言語で、ツングース諸語の一つである。ツングース諸語は系統的に I 群～IV 群のグループに分けられ、ウイルタ語は III 群に属する (Ikegami 1974 [2001: 395] による)。語順は原則として SOV 型で、修飾語が被修飾語に先行する。音韻としては/ a, ə, o, ɵ, u, i, e /の 7 個の母音音素と、/ p, t, k, b, d, g, č, ǰ, m, n, ɲ, ŋ, l, r, s, x, w, j /の 18 個の子音音素からなる (津曲 1988 による)。母音調和が見られ、母音は (1) a, o、 (2) ə, ɵ、(3) u, i, e の 3 グループに分類できる。この内の (1) と (2) のグループに属する母音は原則として一単語内に共起できない。(3)の母音は (1) と (2) いずれのグループの母音とも共起できる (ibid.)。

[2] 形動詞形は①限定語として名詞を修飾する機能、②動名詞となる機能、③文の述語となる機能を持ち (Tsumagari 2009: 9 による)、語幹末が-VV の場合は-ri/-xA(n)、-CV の場合は+ri/-xA(n)、-(C)VC の場合は-ǰi/-či(n)として実現し、本稿の対象となる動詞群には-si/-či(n)が付加される (山田 2013: 98, 100 による)。これらの語尾を取る形動詞形について、Ikegami (1959 [2001]) では人称形動詞・不完了体/完了体という用語を用いているが、Petrova (1967) では形動詞能動形・現在/過去としている。本稿では用語の混同を避けるため、Petrova (1967) の用語に従うこととする。

[3] 池上 (1972 [2001]) は-čin, -xan と表記しているが、末尾音 n (唇音の前で m) は一人称単数語尾-bi や格語尾-ba, -du などの前で現れるもので (Tsumagari 2009: 9)、現れない場合もあるため、以下、本稿では-či(n)、-xA(n)と表記する。

-si/-či(n)をとる形態と、より生産的な形動詞能動形語尾+ri/-xA(n)をとる形態の間にゆれ・交替が見られることを報告し、その上で、交替によって生ずる意味的差異と、ゆれによって想定される規則化について論じることを試みるものである。

なお、本稿では形動詞能動形に-si/-či(n)をとる形態を-si/-či(n)形と呼び、+ri/-xA(n)をとる形態を+ri/-xA(n)形と呼ぶ (+は語幹末と融合することを示し、大文字は母音調和による異形態を代表させた表記とする)。

1. 先行研究

1.1 動詞語尾-si/-či(n)をめぐる議論

1.1.1 Ikegami (1959 [2001])、池上 (1972 [2001])

Ikegami (1959 [2001]) は、動詞語幹末の音韻環境から動詞を厳密にグループ分けし、それぞれの活用形がどのような接尾辞を伴い実現されるかを論じている。この中で、本稿の対象となる動詞群は「0.2 類」と分類され、他の動詞群とは異なり音韻構造だけではとる形態を自動的に決められず、特徴として「質」や「状態」といった共通の意味を持つと指摘されている。

この 0.2 類の動詞については、池上 (1972 [2001]) においてより詳細に論じられている。これはツングース祖語の動詞語尾*-si に関する通時的研究であるが、その中で、次のような語が動詞語尾-si をとると述べている。

(1) ilisi ‘立っている’　ŋaalisi ‘手にさげてあるく’　puisi ‘にえたっている’　pulisi ‘あるいている’
　　təəsi ‘すわっている’　miinəsi ‘切りつづける’　əsi ‘…しない’　andusi ‘つくる’　panusi ‘問う’
(2) ŋənəmusi ‘行きたい’ munalisi ‘おしむ’　namasi ‘あたたかい’ xuturisi ‘かゆい’

(池上 1972 [2001: 356-357])

このうち、ilisi と təəsi は「同じ語幹に語尾*-ra がついた (または両者が融合した) 動詞 illee (*ilira に由来する)、təərə と意味上差異を示し、これらの動詞はそれぞれ‘立つ’、‘すわる’をあらわす。(池上 1972 [2001: 357])」と述べ、同語幹に-si と-ra の両方をとり得る例を認めている。そして、動詞語尾-si が表す意味内容について次のように述べている。

> (1) 語幹が意味する運動、状態を継続するか、くりかえす (一回だけでない) こと、すなわちその運動、状態が時間的に長引くことをあらわし、あるいはまた (2) 語幹が意味する感情、欲求が存在することをあらわし、また語幹が意味するある感覚を、ものごとの属性としてでなく、また知覚の単なる表象としてでなく知覚作用としてあらわしていたようにおもわれる。
>
> ツングース諸言語の語例からみて、この語尾が語幹にむすびつくとき (1) と (2) の意味内容をあらわす動詞のあいだには一般的にはちがいがあり、前者では動詞語幹にその語尾がつき、後者では形容詞語幹にそれがついていたとみられる。したがって (1) の動詞におけるその語尾と (2) の動詞におけるその語尾は一括して扱っても正確には同音意義 (筆者注: 原文ママ) である二つの語尾ということができよう。
>
> (池上 1972 [2001: 357-358])

池上 (1972 [2001]) は、-si をとる動詞が (1) と (2) の二つの意味内容に分けられるとしながらも、上記の説明だけでは、「o-si ‘なる’」のような例は説明しきれず[4]、意味内容は拡大することもあり得ると述べている。

1.1.2 澗潟 (1981)

澗潟 (1981) はウイルタ語の辞書であるが (2.1 節参照)、文法要素も積極的に見出し語に立て、用例と共にその機能を記述している。この中で、-si/-či(n)形をとる動詞について次の3つの項目で記述している。以下、先行研究におけるウイルタ語の表記法はキリル文字による文献からの例も含めすべて本稿に従うものとする。

> -čini -sini (動詞接尾辞) 名詞、形容詞等の動詞化、apta―aptačini, apttasini 味―うまいと思う、baaju―baaječini 怠惰な―怠ける、ənu―ənučini 病気―病気にかかる、irəmə―irəməčini 依頼―依頼する、moччo―moччočini 嫌悪―嫌う、nəənu―nəəčičini 胸やけ―胸やけする、ŋaali―ŋaaličini 手―手に携げる、pinaa―pinaačini 背負った荷物―荷物を背負って一往復する、sapai―sapaičini うるさい―うるさく思う、uuliŋga―uuliŋgačini 良い―謝る。
>
> (澗潟 1981: 28)

> -mučini -musini(動詞接尾辞) 願望、…したい、laluxani―lalumučini 飢える―腹がへって食べたい、koodoxoni―koodomučini のどがかわく―水が飲みたい、ŋənəxəni―ŋənəmučini 行く―行きたい、ənučini―ənumučini 痛む―陣痛になる、dəptuxəni―dəptumučini 食べる―食べたい、腹がへった、gosixani―gosimučini 憎む―憎らしい、gosimoo! 憎たらしいなー！ sloxoni―silomučini 犬が交尾する―発情する、soŋoxoni―soŋomučini 泣く―泣きたい
>
> (澗潟 1981: 135)

> -na(-nə, -no)čini -na(-nə, -no)sini (動詞接尾辞) 動作の反復、持続 galpaxani―galpanačini galpanasini 弓を射る―何度も弓を射る、射続ける、ooloxoni―oolonočini 驚く―驚き放しだ、niixəni―niinəčini 開ける―開けっ放す、purixani―purinačini 潜る―ずーッと潜り続ける、gələxəni―gələnəčini 物を乞う―強請(せび)る、sumuxani―sumunasini 魚が跳ねる―魚が何度も跳ねる、muri poччonosiwani bi oolonočimbi 馬が跳ね続けるのには俺はおどろき放しだった、nəubi ləkkəji garpanasi oччini 弟は矢を射るようになった、looxoni―loonočini 吊り掛ける―吊り掛け放しにしておく。
>
> (澗潟 1981: 138)

澗潟 (1981) の挙げる-mu と-na は、池上 (1972 [2001]) が「願望」「反復」と指摘する接尾辞である。それぞれ、元の動詞 (+ri/-xA(n)形) と、接尾辞-mu、-na によって派生された動詞

[4] -si の成立について、池上 (1972 [2001]) は 2 つの可能性を提示している。第一に、*-si は元来*-s という語幹末に*-i という語尾がついたもので、この*-i が形動詞現在形*-ra の交替形であったという説である。第二に、*-si はもともと語幹末が*-s あるいは*-t で終わる無声子音語幹につく語尾であり、その語幹末尾音が消失したという説である。この場合、その消失した*-s ないしは*-t こそが動詞語幹形成接尾辞であり、この接尾辞が上記 (1) (2) の意味内容を担っていたと考えられる。(池上 1972 [2001: 361-362] 要約)

(-si/-či(n)形) という記述になっている。見出し語の表記と意味記述からして、澗潟 (1981) は持続・反復を表す接尾辞-mu、-na は形動詞語尾-si/-či(n)を伴い、また、形動詞語尾-si/-či(n)は名詞や形容詞を動詞化する働きを持つと捉えているようである。ここで重要なのは、澗潟 (1981) の観察によると、-si/-či(n)をとる動詞には形容詞と同語幹のものが多かったということであろう。これは池上 (1972 [2001]) の記述と合致する。

1.1.3 Petrova (1967), Ozolin'a (2013)

Petrova (1967)[5] は音韻構造的に動詞語幹のタイプを 4 つに大別し、それぞれのタイプごとに実現される活用の形態を論じている。その中で、-si/-či(n)をとる動詞をタイプ IV と呼び、そこからさらに 2 のグループに下位分類している。グループ 1 は動詞語幹形成接尾辞である-ma, -mə, -mo, -na, -nə, -no, -so, -su を伴う動詞群が属する。これらの接尾辞は次のような意味機能を持つと述べられている。

-ma, -mə, -mo: 名詞から動詞を派生する。

語幹が指示する対象を「手に入れる、獲得する」(Petrova 1967: 89 要約)

タイプ IV における例) gasama-「鳥猟をする охотиться на птицу」 tuksama-「兎猟をする охотиться на зайца」 xulumə-「りす猟をする белковать」

-na. -nə, -no: 動詞から動詞を派生する。

断続した行為と、高い頻度か連続して行われる行為 (Petrova 1967: 92 要約)

タイプ IV における例) olono-「身震いする вздрагивать」 potčono-「少し跳ね上がる подпрыгивать」 unənə-「嗅ぎ分ける принюхиваться」

-so, -su: 動詞から動詞を派生する。

何度も行う行為 (Petrova 1967: 92 要約)

タイプ IV における例) waandasu-「狩りに行く ходить убивать」

さらに、次のような動詞群も例外としてグループ 1 を構成するという。

saŋna-「煙る дымить」 uŋgə-「暖まる греться」 sipki-「(複数回) 咳をする кашлять」 li-「いびきをかく храпеть」 baj(si)-「怠ける лениться」 musimu-「微笑む улыбаться」 ui-「ざわめく шуметь」 gujini-「伸びをする потягиваться」 baur-「滑る скользить」 andu-「つくる、する строить, делать」 ə-「…しない (否定動詞)」

また、以下の 4 つの不規則動詞をタイプ IV のグループ 2 と位置付けている。

[5] 以下、Petrova (1967) と Ozolin'a (2001) におけるウイルタ語は次の規則でローマ字化する。
a = a, б = b, в = w, г = g, д = d, е = e, з = ǰ, ǯ = ǰ, и = i, j = j, к = k, л = l, л' = l, м = m, н = n, ң = ŋ, о = o, п = p, р = r, с = s, т = t, у = u, х = x, γ = x, ч = č, э = ə

bi- 「ある、いる、なる быть, делаться」　　o- 「なる становиться」
to- 「する делать, действовать」　　ga- 「とる брать」

Ozolin'a (2013) における動詞語幹のタイプ分類と形動詞能動形の記述も、おおむね Petrova (1967) を踏襲している。

1.2 -si/-či(n)形の変化

風間 (2004) はツングース諸語 III 群の三言語 (ナーナイ語・ウルチャ語・ウイルタ語) を文法・語彙の面から比較し、III 群間の通時的な分岐を考察した論文である。その中で、風間 (2004) は形容詞の形式を対照し、ナーナイ語では元々形動詞能動形現在語尾の-si であったものが化石化して形容詞語幹の一部となったと考えられるものが多くあるのに対し、ウイルタ語では未だ-si/-či(n)による時制の対立が保持されており、形容詞にはより古い形式である-uli が多く使われることを指摘している。そして、ウルチャ語は両者の中間的な特徴を持ち、-si 形、-ʊlɪ 形形容詞ともに用いられると述べている。

表 1: ツングース諸語Ⅲ群内の形容詞比較

	ナーナイ語	ウルチャ語	ウイルタ語
痛い	ənusii	ənuwli	ənuuli
暖かい	ňamasɪɪ/ňama	ňamaʊlɪ	namauli
眠い	aamasɪɪ	aamasɪ/aamawlɪ	aamauli

(風間 2004: 96 より一部抜粋)

これら 3 つの語は、ウイルタ語ではいずれも ənu-「痛む」 nama-「暖かく感ずる」aama-「眠たいと思う」という形動詞語尾-si/-či(n)を伴う動詞として、依然時制変化を保っている。それに対応する形容詞形が上記の-uli 形である。

さらに、ウルチャ語は-si 形と-ʊlɪ 形のどちらの形容詞も用いられるばかりでなく、形動詞形においても-si/-či(n)形と-ri/-xA(n)形の両方が許容される語があるという。

> すなわち、Petrova (1936) によれば、pul(si)-「行き来する」、xer(si)-「呼ぶ」、ala(sɪ)-「待つ」、ən(si)-「痛む」、ňaʊl(sɪ)-「投げる、投げ下ろす」などの動詞において、その過去形は pulsixəni~pulčini、xərsixəni~xerčini、alasɪxani~alačinɪ、ənusixəni~ənučini、ňaʊlsɪ~ňaʊlčinɪ、と両様の形が観察されるという。ここでもウルチャ語の中間的な性格が観察される。
>
> (風間 2004: 99-100)

以上の比較を通じて、風間 (2004) はウイルタ語が古い形式を保持しているのに対し、ナーナイ語ではそれが規則化・化石化しており、ウルチャ語はその過渡的状況にあることを指摘している。ウイルタ語と同じ III 群のナーナイ語、ウルチャ語で規則化・化石化の動きが見られることは、ここでは言及されていないものの、ウイルタ語においてもそのような変化が起こり得ることを示唆している。

1.3 まとめ

以上の先行研究を総合すると、池上 (1959 [2001]) が 0.2 類と呼び、Petrova (1967) がタイプ IV グループ 1 と呼んだ動詞群の形態的特徴は、以下のようにまとめることができる。次の表 2 は、-si/-či(n)をとると指摘されている動詞語幹形成接尾辞が、それぞれの先行研究でどのように記述されているかをまとめたものである。「-si/-či(n)」と書かれた部分は形動詞能動形に-si/-či(n)を伴うと記述されていることを意味し、「+ri/-xA(n)」と書かれた部分は+ri/-xA(n)を伴うと記述されていることを意味する。また、「×」は記述がないことを意味する。網掛けは+ri/-xA(n)を伴うか、記述がない先行研究を示している。

表 2: 形動詞能動形に-si/-či(n)をとる動詞の形態的特徴

	-nA (継続)	-mu (感情)	-su (反復・継続)	-mA (獲得)
池上 (1972 [2001])[6]	-si/-či(n)	-si/-či(n)	×	×
澗潟 (1981)	-si/-či(n)	-si/-či(n)	+ri/-xA(n)	+ri/-xA(n)
Petrova (1967)	-si/-či(n)	×	-si/-či(n)	-si/-či(n)
Ozolin'a (2013)	-si/-či(n)	×	-si/-či(n)	-si/-či(n)

Petrova (1967) と Ozolin'a (2013) はこの条件だけでは処理しきれない例を「例外」として多数挙げており、池上 (1972 [2001]) ではそういった形態的に想定しきれない語を念頭に、意味的共通性からの解釈を行っている。これらを総合すると、次のような特徴を想定し得る。

- 継続・反復を表す-nA、反復を表す-su、獲得を表す-mA、感情を表す-mu によって派生された動詞
- 上述の意味を語彙的に備えている動詞

Petrova (1967) と Ozolin'a (2013) が指摘する接尾辞のうち、-nA と-su, -so は Ikegami (1973 [2001]) において反復を表す-nA と、反復・継続を表す-su として指摘されているものである。しかし、澗潟 (1981) では、-nA は-si/-či(n)をとると記述されているものの、-su と-mA は+ri/-xA(n)を伴う動詞として記述されている。同じく辞書である池上 (1997) でも同様に、-mA と-su によって派生された動詞は+ri/-xA(n)を伴って記述されている。池上 (1972 [2001]) では、-mA と-su についての記述はない。一方で、Petrova (1967) と Ozolin'a (2013) では、感情を表す-mu が-si/-či(n)形をとるという記述はない。この違いの要因について、澗潟 (1981) と池上 (1997)、Ikegami (1973 [2001]) が南方言を記録した辞書・論考であり、一方で、Petrova (1967) と Ozolin'a (2013) が北方言を記録した文法書であることから、1 つには方言差[7]という可能性が考えられる。しかし、Petrova (1967) には、-ma と-su に関する澗潟 (1981) の以下の記述の反例となる用例が挙げられている。

[6] 1.1.1 節で引用した例の他、池上 (1972 [2001: 364-365]) の注 (13) を参照されたい。
[7] ウイルタ語には北方言と南方言の 2 つがある。詳しくは池上 (1994 [2001]) を参照されたい。

-ma(-mə, -mo, -mə)xa(xə, xo, xə)ni -mmeni (動詞接尾辞) 獲得に行く、tuksa―tuksamaxani tuksammeeni 兎―兎狩りする、gasa―gasamaxani 鳥―鳥を獲りに行く、suŋdatta―suŋdattamaxani 魚―漁に行く、bojol―bojolmoxoni 大きな獣―大きな獣を獲りに行く、pəətə―pəətəməxəni アザラシ―アザラシ猟に行く、xələ―xələməxəni 木鼠 (リス) ―木鼠を獲りに行く、patala―patalamaxani 乙女―夜這に行く、alduu―alduumaxani 消息―消息を訊 (たず) ねる、kalaxani―kalamaxani 取り替える―取り替えに行く、aduli―adulimaxani 網―網を調べに行く、xuriačixani―xuriamaxani 熊祭する―熊祭した熊の肉を食いに行く、booli―boolimaxani 山中で獣の集まる所－booli へ猟に行く、təəri―təəriməxəni 若い鱒―若い鱒を獲りに行く、(təəriməmbee 六月)、gərə―gərəməxəni 罠―罠に獲物がかかったか調べに行く

(潤潟 1981: 125)

-suxa(xə, xo)ni -ssini (動詞接尾辞) 動作の反復持続、moowo čiaalixani―čiaasuxani, čiaassini 木を折る―木を折りつづける、uktulixani―uktusuxani 突きあてる―何度も小突く、lamuxani―lamusuxani 雪が積もる―雪が積もり続く、taaxani―taasuxani 踏み固める―何回も踏んで固める、duurəlixəni―duurəsuxəni ふたつに分ける―何 回にも分ける、uunixəni―uunisuxəni 話しに行く―何度も話しに行く、xəkpəlixəni―xəkpəsuxəni 土をくずす-土をくずし続ける、torpolixani―torposuxani 穴をあける―沢山穴をあける。

(潤潟 1981: 197)

これらの動詞について、Petrova (1967) では、-ma, -mə, -mo によって構成される gasama-「鳥猟をする」、tuksama-「兎猟をする」や、-su によって構成される waandasu-「狩りに行く」が-si/-či(n)をとると記述されている。先にも述べた通り、これらの差異は方言差に起因する可能性がある。しかし、次の例 (3) は、その行為が習慣的であることを示す文であり、単に完結した行為を表しているのではない。これらが方言差であるのか、それともウイルタ語内部でのゆれ・交替なのか、あるいはその両方であるのかは今後の報告を待ちたい。

(3) ǰoloni inəŋ=inəŋ sirombo waandasusini, pundani[8] muuwə
[Joloni] day=day wild.reindeer-ACC go.hunting-PRES-3SG sister-3SG water-ACC
muulisini, irgalawa irgeeni,
go.drawing.water-PRES-3SG pettern-ACC decorate+PRES-3SG
xaiwa=dda čipali andusini.
what-ACC=EMPH all make-PRES-3SG
ジョロニは毎日野生となかいを獲りに行く、妹は水を汲みに行き、模様を縫い、なんでもすべて作る。

(Petrova 1967: 143)

以上見てきたように、形動詞能動形接尾辞-si/-či(n)それ自体は記述されているものの、ウ

[8] 池上 (1997) では pundadu、Ozolin'a (2001) では pundado (pundadu) と表記されているが、ここでは punda となっている。

イルタ語においてはそれが完全に語彙的に決まっているわけでなく、より生産的な+ri/-xA(n)形との間で方言差もしくはゆれ・交替が一定数存在することは、管見の限りでは未だ報告を待つ段階である。本稿は、形動詞能動形語尾-si/-či(n)と+ri/-xA(n)のどちらも取り得る例が、池上 (1972 [2001]) で挙げられている 2 例以外にもあり、意味的に使い分けの見られるものと、そうではないものがあることを報告し、-si/-či(n)形と+ri/-xA(n)形の間のゆれ・交替の考察を試みる。

2. 調査方法

2.1 収集方法と結果

本研究では、まず、現在刊行されている辞書から形動詞能動形に接尾辞-si/-či(n)をとる動詞を収集し、そうして得られた語についてテキスト資料から用例を収集した。使用した辞書は、池上 (1997) 、澗潟 (1981) 、Ozolin'a (2001) である。池上 (1997) はウイルタ語南方言約 4,500 語を収録した辞書で、緻密な記述がなされている。澗潟 (1981) も南方言を記録した辞書で、文法要素も見出し語に立てていることや、豊富な例文を掲載していることが特徴的である。両辞書ともに、動詞の見出しが三人称単数・形動詞能動形で記されているため、それぞれから見出し語が-si/-či(n)形の動詞を抽出した。Ozolin'a (2001) は、北方言・南方言合わせて約 12,000 語を収録したウイルタ語―ロシア語辞書である。この辞書は見出し語の語形が必ずしも明確でないため、例文内で形動詞能動現在形[9]が使用されている語のみを収集対象とした。用例収集には上記辞書の他、ウイルタ語テキストである Petrova (1967) 、池上 (2002) 、山田 (2013) 、山田他 (2014) を使用した。ロシア語和訳・グロスは筆者によるが、ウイルタ語の訳はそれぞれのテキストによる。また、山田 (2013) からの用例は訳・グロスともに山田 (2013) によるが、グロスの略号は本稿に従う。

2.2 収集結果

収集の結果、3 つの辞書合わせて 187 語の-si/-či(n)をとる動詞が確認された。そのうち、+ri/-xA(n)形との間でゆれ・交替が見られたものは合わせて 42 例であった。それらは大きく分けて、+ri/-xA(n)形との間で意味的な使い分けが見られるものとそうでないものの 2 種類があり、前者は 24 例、後者は 14 例確認された。以下では、3.1 節で意味的な使い分けの見られる交替について、3.2 節で使い分けの見られないゆれについて論じていく。なお、辞書での意味記述に大きな差が見られた ŋaali(-si/-či(n))-「手にさげてあるいている (池上 1997)」と ŋaalisi(+ri/-xA(n))-「手を引いて連れて行く вести за руку (Ozolin'a 2001)」、xawasi (+ri/-xA(n))-「(呼吸など) くるしくなる (死ぬとき)、あばれる (酒に酔って、あるいは、死ぬとき苦しくて) (池上 1997)」と xawasi(-si/-či(n))-「震える、耐える дрожать, трепетать (Ozolin'a 2001)」の 2 例は今回の考察には含めない。

[9] -či(n)は子音語幹動詞や不規則動詞にも後接し、また、多回を表す動詞語幹形成接尾辞-či とも音を同じくするため、正確に判断できない可能性がある。

表 3: -si/-či(n)をとる動詞の収集結果

-si/-či(n)形	-si/-či(n)形と同語幹で+ri/-xA(n)形も確認されたもの		
	意味的使い分けのあるもの	意味的使い分けのないもの	意味記述が異なるもの
187	24	14	2
	42 (合計)		

3. 形動詞能動形の交替とゆれ

3.1 意味の差が明確な交替

3.1.1 -si/-či(n)形が進行・継続・反復を表す場合

-si/-či(n)形が進行・継続・反復の意味を表す場合、それに対応する+ri/-xA(n)形は以下の 3 つの意味に解釈され得る。

第一に、+ri/-xA(n)形が事象の完結を意味する場合である。allau-「教える」の-si/-či(n)形である (4) が「教える」という行為の一部分を切り取った典型的な事象の継続を表すのに対し、+ri/-xA(n)形である (5) はその事象の全体を捉えて述べている。 (6) と (7) も同様に、gata-「(液果を)とる」という行為に対し、前者は行為の最中であることを描いているが、後者では行為が 1 つの完結した出来事として述べられている。このタイプのうち、-si/-či(n)が継続を表すものには dɵɵri-「運ぶ」、eero-「詳細に見る」といった、語彙的に一定時間行為を継続し得る継続動詞が当てはまる。また、-si/-či(n)が反復を表すものもある。このタイプには amuni-「大便に行く (+ri/-xA(n))」/「ひっきりなしに大便に行く (-si/-či(n))」、mɵɵli-「水を汲みに行く (+ri/-xA(n))」/「なんども水を汲みに行く (-si/-či(n))」などが含まれる。+ri/-xA(n)形では形動詞語尾-si/-či(n)が持つ継続性・反復性を排除した解釈がなされる。

(4) čii allausini. eekkuччeeŋuči[10] tari čii nooni
all.the.time teach-PRES-3SG steer+PRES-AP-3PL that all.the.time 3SG
unǰikkeeni ŋaaladǰi nuŋǰiччikkeeni[11] čii ŋənneeni.
say-PRES-PRL-3SG hand-INS.REF point.to+PRES-PRL-3SG all.the.time go+PRES-3SG
ずーっとおしえている。かじがいをとるものはそうやってずーっと例のかれが言うところを自分の手でかれがさしているところをずーっと行く。

(池上 2002: 28)

(5) təəli uilta kəssəəni muttəi təəluŋučimi allauxani,
then Uilta language+ACC-3SG 1PL.DIR tell.legend-CONV.COOR teach-PAST-3SG
xooni kəssəə nurripoo.
how language+ACC write+PRES-1PL+WHQ
そこでウイルタのことばについて私たちに説明しながら、どうやってことばを書き表

[10] ここでは語幹 eekkuta-に形動詞能動形現在+ri が融合して eekkuччee-となっている。
[11] ここでは語幹 nuŋǰiči-に形動詞能動形現在+ri が融合して nuŋǰiччi-となっている。

わすのか、教えてくれた。

(山田 2013: 170)

(6) namu bugaatattaini xaakkaččeeri siduxumbə gatasičindaa.
sea island-DIR-3SG leach.land-CONV.SUB.PL berry-ACC gather-PRES-3PL-HS
海の島へふねをつけていちごをとっているんだと.

(池上 2002: 55)

(7) gojlani anani goči saŋnamba gaattaxani.
other-LOC-3SG year-3SG again tobacco-ACC gather-PAST-3SG
別の年にまた彼は(そこで)たばこを集めた。

(Ozolin'a 2001: 57)

第二に、+ri/-xA(n)形が行為によってもたらされる結果の残存を表す場合である。 (8) はその時まさに枝が折れるという事態の進行を描いているが、 (9) はすでに壊れてしまってそこにあるという、行為による結果とその残存が表現される。この動詞語幹 bujada-「壊れる」は本来瞬間動詞 (後述、3.1.2 参照) であるが、それに反復アスペクト接尾辞-nA がついて形成されているため、(10) のように、継続・進行を含意する-si/-či(n)形では「折れる」という一瞬の事象が繰り返し行われる、反復の解釈がなされると考えられる。ただし、先行研究にもある通り、反復アスペクト接尾辞-nA は多くの場合-si/-či(n)を伴うため、今回の調査で交替が確認されたのはこの例のみである。

(8) apkamari ətčipu kulpee[12] dolǰiptuxani
lie.down-CONV.COOR.PL NEG-PAST-1PL have.time+PRES be.audible-PAST-3SG
bojon bunini, moo bujdanasini.
bear cry-3SG wood be.broken-PRES-3SG
寝入る間もなく、クマの唸り声と枝の折れるのが聞こえてきた。

(Ozolin'a 2001: 46)

(9) si bittisi duku bujadanaxani.
2SG be-PAST-2SG house be.broken-PAST-3SG
お前が長年住んでいた家が壊れている。

(Ozolin'a 2001: 46)

第三に、+ri/-xA(n)形が「〜しに行く」という意味を表す場合である。3 つの辞書の意味記述を見る限り、このタイプの使い分けは一定数確認された。ウイルタ語には行為の方向や

[12] ここでは語幹 kulpi-に形動詞能動形現在 (否定) +rA が融合している。

意志を表す-ŋdA[13]という生産的な動詞語幹形成接尾辞があるが、0.2 群の動詞群の一部はこの接尾辞を伴わずに、その+ri/-xA(n)形が「～しに行く」という意味で記述されている[14]。しかし、(10) (11) を見ると、(10) はその場で進行している行為を描写しているのに対し、(11) はその場から離れた場所へ行って行為をすることを示している。この対立は、「継続・進行」vs「(一種の) 将然」と捉え得る。この問題については、3.3 節で改めて論ずる。

(10) moo moolisuu. puksəŋə moo mooličinindaa.
wood gather.wood-IMP [Puksəŋə] wood gather.wood-PAST-3SG-HS
puksəŋəmbə moo moolipookkaatči korixanindaa
[Puksəŋə]-ACC wood gather.wood+CAUS-CONV.SUB put.logs.together-PAST-3SG-HS
argačča puksəŋəmbə.
[Argačča] [Puksəŋə]-ACC
「まきをあつめろ。」プクシャガはまきをあつめたと。プクシャガにまきをあつめさせてまるたを井桁にくんでかこんだと、アルガッチャがプクシャガを。
(池上 2002: 65)

(11) mapačča purəttəi moowo mooloxoni
old.man mountain-DIR wood-ACC go.gather.wood-PAST-3SG
じいさんは山へまきをとりに行った。
(Ozolin'a 2001: 187)

3.1.2 -si/-či(n)形が結果残存を表すもの

-si/-či(n)形が結果残存を表す場合には、+ri/-xA(n)形は事象を完結したものとして表現する。(12) と (13) は一続きの出来事であるが、(12) は座るという行為を全体として捉えている一方、座ったあとの (13) では、瞬間的に変化した体勢をそのまま保っていることを-si/či形で描写している。(14)、(15) も同様に、+ri/-xA(n)形の (14) が「立つ」という完結した動作の様相を表すのに対し、-si/-či(n)形の (15) は立ち上がった状態を保持していることを表現している。このタイプは他に gəlburi-「名前を付ける」、pui-「煮える、沸く」など、瞬間動詞に多く見られる。

(12) čootči aŋni unǰini, "gə, bu duunne yə
then old.brother say-PRES-3SG INTJ 1PL two.people this
tugduləmbəri taldanduni təərisu". gə, nooci
log.bridge-ACC.REF.PL middle-DAT-3SG sit-PRES-2PL INTJ 3PL

[13] -ŋda~-ŋdə~-ŋdo~-ŋdɵ~-nda~-ndə~-ndo~-ndɵ~-ni~-i と交替する (池上 1973 [2001])。
[14] moolo-に-ŋda をつけた場合、「moolondo- 他の家(他の人)に一緒に薪をとりに行くよう頼みに行く」となる (Ikegami 1973 [2001])。

tugduləmbəri taldanduni təəxəci.[15]
log.brigde-ACC.REF.PL middle-DAT-3SG sit-PAST-3PL
そこで兄は言う、「さあ、オレたち二人はこの自分らの橋の真ん中に座ろう。」さあ、彼らは自分らの橋の真ん中に座った。

(Petrova 1967: 128)

(13) nooči či təəsiči. či təəsiduči dolboni
3PL all.the.time sit-PRES-3PL all.the.time sit-PRES-DAT-3PL night-3SG
taldambani lakka otčini.
middle-ACC-3SG near become+PAST-3SG
彼らはそうして座っている。そうして座っている時に、夜中近くになった。

(Petrova 1967: 128)

(14) tamačawa əsi=məli itəxəmbi. čotči bojo(n) ilixani
like.that-ACC first see-PAST-1SG after.that bear stand.up-PAST-3SG
そんな風なのを今こそ初めて見た。するとクマは立ち上がった。

(Petrova 1967: 127)

(15) tar ŋənneeduni naaǰela giida nari ilitčini.
then go+PRES-DAT-3SG land.side-LOC one person stand-PAST-3SG
そうして行く時に、陸地の側に一人の人が立っていた。

(Petrova 1967: 131)

3.1.3 -si/-či(n)形が知覚作用を表すもの

-si/-či(n)形が知覚作用を表す場合、+ri/-xA(n)形はその知覚作用の要因となる行為や属性の変化を表す。 (16) (17) はいずれも主語が騒いでいることを表しているが、 (16) は主語であるこどもが騒いでいるのを話者が煩わしく感じていることが特に表現され、 (17) では話者の知覚作用よりも騒いでいる行為そのものに主眼が置かれている。今回の調査では、他に pakčira(-si/-či(n))-「暗い (池上 1997) 」と pakčira(+ri/-xA(n))-「暗くなる (池上 1997) (Ozolin'a 2001) 」が確認された。このタイプの使い分けは形容詞と同語幹の動詞に見られ、これは、-si/-či(n)が表す意味内容が、ものごとの属性や知覚の単なる表象ではなく知覚作用であったという池上 (1972 [2001]) の指摘にも合致する。

(16) puttə tapsaisini.
child be.annoyed-PRES-3SG
こどもがうるさい (親が言う)。

(池上 1997: 200)

[15] 原文では təəγəči と表記されているが、[γ]は/x/の異音であり (Petrova 1967: 13)、ここでは表記を統一する。

(17) si xaimi mimbe tapsairisi?
2SG why 1SG.ACC annoy-PRES-2SG
お前どうして俺にうるさくするんだ？

(澗潟 1981: 204)

3.2 意味の差が不明確なゆれ

3.1 節では意味的な使い分けのあるものを見たが、中には必ずしも意味的差異が明確でないものも見られる。これらは、風間 (2004) の指摘する、-si/-či(n)形の+ri/-xA(n)形への規則化によるゆれであると考えられる。以下では、語幹が-si/-či(n)形と+ri/-xA(n)形で同形のものと、-si/-či(n)形語尾が化石化したと推測されるものに分けて取り上げる。

3.2.1 -si/-či(n)形と+ri/-xA(n)形が同形のもの

(18) は gulturi-「疲れる」の+ri/-xA(n)形、 (19) は-si/-či(n)形であるが、いずれも「疲れた」という状態を表す。このタイプのゆれには池上 (1972 [2001]) が指摘するところの「形容詞語幹由来」の語が多いが、daxuri-「承諾する、言うことをきく」といった動詞でも見られる。他には bauri-「つるつるすべる」、guǰǰeelə-「あわれむ、ふびんをかける」、nuŋǰi-「寒く感じる」、siiwee-「きれいにする、ほじる」などがある。

(18) mapa pulimi gulturixani
old.man walk-CONV.COOR be.tired-PAST-3SG
おじいさんは歩いて疲れた。

(Ozolin'a 2001: 69)

(19) əsinəŋi nooni maŋga gukturisini[16]
today 3SG very be.tired-PRES-3SG
今日、彼はとても疲れている。

(Ozolin'a 2001: 69)

3.2.2 形動詞語尾-si/-či(n)が化石化したと考えられるもの

(20) と (21) はいずれも「悪く思う」という意味の動詞であるが、(20) は語幹が orki-であるのに対し、(21) は語幹が orkisi-と-si が化石化し、さらに生産的な形動詞語尾+ri が融合している[17]。今回収集した中では、化石化が推測されるものには池上 (1972 [2001]) が指摘するところの「形容詞語幹由来」の動詞が多いが、(22) (23) əmu-「(ゆりかご) を揺り動かしている」のような、継続性の高い動詞でも確認された。この他には alasi-「かわいがる」、itəmə(i)si-「恥ずかしい」などがある。

[16] Ozolin'a (2001: 69) によると、gukturi-と gulturi-は同じであると述べられており、ここでは gukturi-となっている。
[17] 池上 (1997) はこの動詞を現在形 orkissi-、過去形 orkisixa-のように時制変化するものと記述している。

(20) aanda, mittəj orkisisi, ii?
friend 1SG-DIR dislike-PRES-2SG yes
友よ、君は私に腹を立てているのかい？

(Ozolin'a 2001: 245)

(21) tari nari noottoini orkissini. [18]
that person 3SG-DIR-3SG dislike+PRES-3SG
その人はあの人を悪く思っている。

(池上 1997: 148)

(22) puttəə əmusini.
baby+ACC cradle-PRES-3SG
幼児をゆりかごに入れてかの女はゆり動かしている。

(池上 1997: 58)

(23) dolbo=dolbo puttəəni sonoluxanduni[19] mama əmusixani.[20]
night=night baby+ACC-3SG start.crying-PAST-DAT-3SG old.woman cradle-PAST-3SG
毎晩、子供が泣き始めた時に、おばあさんはゆりかごを揺らしていた。

(Ozolin'a 2001: 413)

3.3 まとめ

-si/-či(n)形と-ri/-xA(n)形の意味的な使い分けを図にすると、次のようになる。

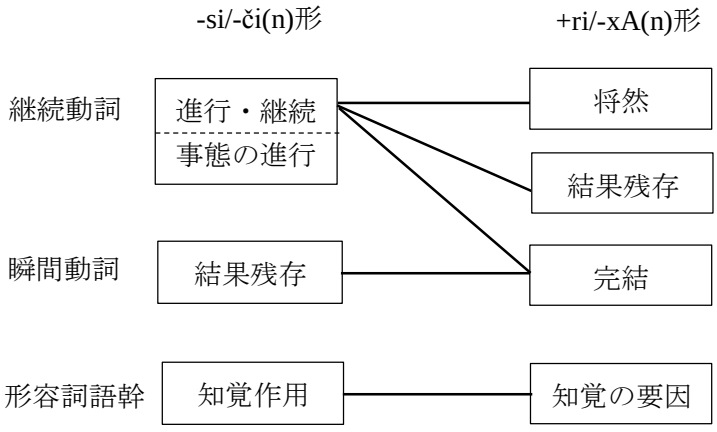

図 1: -si/-či(n)形と+ri/-xA(n)形の使い分け

[18] ここでは語幹 orkisi-に形動詞能動形現在+ri が融合している。

[19] 「泣く」は池上 (1994 [2001]) によると南方言も北方言も軟口蓋鼻音を用いた soŋo-であるが、ここでは sono-となっている。また、原文では口蓋化を表す'を伴って sonol'uxanduni と表記されているが、同著者の文法書である Ozolin'a (2013: 16) によると、l'は/l/の異音であり、ここでは表記を統一する。

[20] 母音調和によって əmusixəni となり得るところであるが、ここでは əmusixani となっている。

2 つの形式の意味を比較すると、最大の違いは「継続性・反復性の有無」であると考えられる。-si/-či(n)形の場合には、「進行・継続」「結果残存」のどちらとも高い「継続性」あるいは「反復性」を有する。これはまさに池上 (1972 [2001]) の指摘するところの意味内容である。そして、これらを有さないのが+ri/-xA(n)形に見られる 3 つの意味内容である。しかし、そこで特徴的なのが+ri/-xA(n)形で「～しに行く」となる動詞群である。今回の辞書項目の調査で収集された語の中で、+ri/-xA(n)形が「～しに行く」という意味を表す動詞は以下の通りである。断りのないものは池上 (1997) からの意味記述である。提示に際し、動詞語幹を明確に示すため、動詞語幹と形動詞能動形語尾が融合しない過去形 (-či(n), -xA(n)) で示した。ハイフンは語幹と形動詞能動形語尾の境界を表している。

表 4: +ri/-xA(n)形が「～しに行く」と記述されている動詞一覧

語形 (過去形)	意味
doromo-či(n)	ぬすむ
doromo-xo(n)	ぬすみに行く
eksuma-či(n)	借りたい、借りる
eksuma-xa(n)	借りに行く
irəmə-či(n)	くれとたのむ
irəmə-xə(n)	もらいに行く
ǰiima-či(n)	よその家で御馳走になる
ǰiima-xa(n)	およばれして行く
mooli-či(n)	まきをとっている
moolo-xo(n)	まきをとりに行く
məəli-či(n)	水くみに行っている
məələ-xɵ(n)	水をくみに行く

語形 (過去形)	意味
nuŋələ-či(n)	相談して指図 (許可) を求める
nuŋələ-xə(n)	相談しに行く
sinələ-či(n)	(液果を) とっている
sinələ-xə(n)	液果をとりに行く
uula-či(n)	立木から樹皮をはいでいる
uula-xa(n)	立木の樹皮をはぎに行く
xurala-či(n)	立木から樹皮をはぐ
xurala-xa(n)	木の皮をはぎに行く
alduuma-či(n)	消息を訊ねる (潤潟 1981)
alduuma-xa(n)	消息を聞きに行く (潤潟 1981)

これらの動詞の+ri/-xA(n)形はいずれも「～しに行く」という表現で記述されている。しかし、これらの動詞はいずれも距離・時間を隔てた対象への働きかけが含意される動詞であると言える。言い換えれば、これらの動詞では、すでに対象が眼前にある場合には、「行為を行う＝進行 (継続)」を表し、眼前にない場合には行為が始まる前、つまり「これから行う」ことを表す。

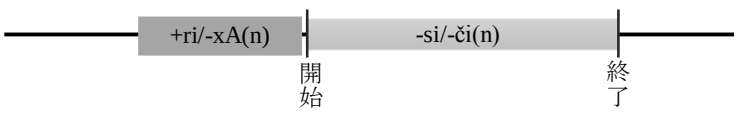

図 2: 「将然」タイプの動作の局面

次の例 (26) (27) はそれをよく表している。(26) は距離を隔てた先にてこれから採ることを表すが、(27) はまさに採っている最中を表す。つまり、これらの動詞は、その語彙的性質

によって、眼前に対象がある場合は進行 (継続) となり、それと呼応して-si/-či(n)形をとる。一方、+ri/-xA(n)形をとるときにはその継続性は排除され、距離を隔てた対象に対し「これから行う」という、いわば「将然」とでも言うべき未来の行為を表すと考えられる。もちろん、時制としての「未来」を表すわけではなく、あくまでも動作の局面としてとらえた場合であり、用語の使用にもまだ検討の余地がある。これについては今後の課題としたい。

(24) balǰigaččeeri　　sinəktəə　　sinəlleečindəə　　ugdaǰi.
be.born-CONV.SUB.PL　　berry+ACC　　gather.berry+PRES-3SG-HS　　boat-INS
うまれてからのことシナクタをとりに行くんだと、ふねで。

(池上 2002: 88)

(25) sinəktəə　　sinələsini.
berry+ACC　　gather.berry-PRES-3SG
(ねずみが)液果をとっている。

(池上 1997: 185)

4. おわりに

本稿では、ウイルタ語において形動詞能動形-si/-či(n)をとると言われている動詞が実際には-si/-či と規則的な能動形+ri/-xA(n)のどちらもとり得る現象を報告し、それを意味的な使い分けのある交替と規則化の一環と見られるゆれとに分け、さらにその意味的な使い分けの関係を明らかにすることを試みた。その結果、第一に、意味的差異の見られるものは「継続性・反復性の有無」によって使い分けられ、+ri/-xA(n)形はこれらを排除した 3 つの解釈「完結」「結果状態」「(ある種の) 将然」がなされることを示した。また、形容詞由来の語については-si/-či(n)形が「知覚作用」を表し、+ri/-xA(n)形はその要因となる行為・変化を表すことを示した。第二に、意味的差異の見られないものは、ナーナイ語やウルチャ語などで指摘されている規則化の一環であり、形容詞由来の語や、語彙的に状態性・継続性の高い動詞に多く見られることを示した。さらに、+ri/-xA(n)形が「将然」となる場合について、語彙的性質からの考察を試みた。

今回はテキスト資料を中心に調査・分析を試みたが、テキストからの用例を得られなかった語も多くあり、形動詞能動形-si/-či(n)形の全体像を明らかにするためには資料量、調査方法ともに決して十分とは言えない。今後は、今回明らかになった事実を基に、インフォーマント調査や新たな資料を用いた調査を行っていく必要がある。特に、インフォーマント調査はウイルタ語の現状を鑑みるに喫緊の課題と言えるだろう。また、今回は-si/-či(n)形と+ri/-xA(n)形が同語幹のペアであるもののみを扱ったが、-si/-či(n)形を考えるにあたっては、短時間の行為を表す-lA や-li などによって派生された動詞との差異も重要であるだろう。加えて、今回はウイルタ語に限定して調査・考察を行ったが、本稿の対象となった形動詞語尾-si はツングース祖語にまで遡る可能性が指摘されているものであり、また、III 群内でのゆれも報告されていることから、ツングース諸語全体を通じた考察も不可欠である。本稿の報告を足掛かりに、今後さらに接尾辞-si/-či(n)に関する考察が深まっていくことを期待す

る。

［謝辞］
本稿の執筆にあたっては、指導教員である風間伸次郎先生から懇切なご指導を賜った。また、査読者のお二人からは大変重要なご教示やご指摘を数多く頂き、本稿は見違えるものとなった。ここに記して、深く御礼申し上げる。当然ながら、本稿における全ての誤りは筆者に帰するものである。

略号一覧

+: 融合	–: 形態素境界	=: 複合又は接語境界	[ ]: 固有名詞
1: 一人称	2: 二人称	3: 三人称	ACC: 対格
AP: 譲渡可能	CAUS: 使役	CONV: 副動詞	COOR: 等位
DAT: 与格	DIR: 方向格	EMPH: 強調	HBT: 習慣形動詞
HS: 伝聞	IMP: 命令形	INS: 具格	INTJ: 間投詞
LOC: 場所格	NEG: 否定動詞	OPT: 希求	PAST: 能動形動詞形過去
PL: 複数	PRES: 能動形動詞形現在	PRL: 沿格	REF: 再帰
SG: 単数	SUB: 従属	WHQ: 疑問詞疑問	

参考文献

Ikegami, Jiro (1959 [2001]) The Verb Inflection of Orok.『ツングース語研究』24-72. 東京: 汲古書院 (初出:『国語研究』9: 34-73. 国学院大学国語研究会)

_____(1973 [2001]) Orok Verb-Stem-Formative Suffixes.『ツングース語研究』73-93. 東京: 汲古書院 (初出:『北方文化研究』7: 1-17.)

_____(1974 [2001]) Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprachen. 『ツングース語研究』395-396. 東京: 汲古書院 (初出: *Sprache, Geschichte und Kultur der Altaischen Völker, Protokollband der XII. Tagung der Permanent International Altaistic Conference 1969 in Berlin*: 271-272. Berlin: Akademie-Verlag)

池上二良 (1972 [2001])「ツングース祖語の一つの動詞語尾について—*-si に関して—」『ツングース語研究』353-363. 東京: 汲古書院 (初出:『現代言語学』651-663. 東京: 三省堂)

_____(1994 [2001])「ウイルタ語の南方言と北方言の相違点」 『ツングース語研究』247-283. 東京: 汲古書院 (初出:『北海道立北方民族博物館研究紀要』3: 9-38.)

_____(1997)『ウイルタ語辞典』札幌: 北海道大学図書刊行会

風間伸次郎 (2004)「ツングース諸語における III 群の形成について」 津曲敏郎 (編)『環北太平洋の言語』11: 91-114.

澗潟久治 (1981)『ウイルタ語辞典』 網走: 網走市北方民俗文化保存協会

Ozolin'a, L. V. (2001) *Oroksko-russkii slovar': okolo 12000 slov.* Novosibirsk: Izdatel'stvo SO RAN.

_____(2013) *Grammatika Orokskogo Jazyka.* Novosibirsk: Izdatel'stvo Geo.

Petrova, T. I. (1936) *Ul'chskij dialekt nanajskogo jazyka.* Moskva-Leningrad: Gosudarstvennoe

uchebnopedagogicheskoe izdatel'stvo.

_____(1967) *Jazyk orokov (Ul'ta)*. Leningrad: Izdatel'stvo NAUKA.

Tsumagari, Toshiro (2009) Grammatical Outline of Uilta (Revised). *Journal of the Graduate School of Letters* 4: 1-21. Sapporo: Hokkaido University.

津曲敏郎 (1988)「ウイルタ語」 亀井孝、河野六郎、千野栄一 (編)『言語学大辞典』 1: 744-746. 東京: 三省堂

山田祥子 (2013)「ウイルタ語北方言の文法と言語接触に関する研究」 博士論文 北海道大学

山田祥子編訳、池上二良採録・解説、佐藤チヨ演唱、E.ビビコワ露訳、津曲敏郎監修・序 (2014)『ウイルタ長編英雄物語ニグマー シーグーニ物語テキスト』 札幌: 北海道大学大学院文学研究科

The Fluctuation and Alternation of Active Participle Forms in the Uilta Language

Satoe MORIKAI
(Graduate School, Tokyo University of Foreign Studies)

This paper analyzes the fluctuation and alternation of two active participle forms in Uilta: one is formed by the suffixes *-si/-či(n)*, and the other is formed by the suffixes *+ri/-xA(n)*, which is more productive than the former. This alternation between *-si/-či(n)* and *+ri/-xA(n)* usually results in changes in meaning. While the *-si/-či(n)* form conveys continuous and iterative aspects, the *+ri/-xA(n)* form contrastively conveys perfective, resultative, and prospective aspects. The fluctuation of forms, however, sometimes does not make any aspectual differences. This means that the participle forms formed by suffixes *-si/-či(n)* are regularized to the *+ri/-xA(n)* form, which has also been observed in neighboring languages such as Nanai and Ulcha.

（もりかい・さとえ morikai.satoe.o0@tufs.ac.jp）